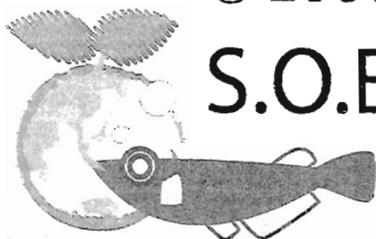


◎ 2007年もよろしくお願ひいたします◎



# S.O.E. News no.21

ホームページもご覧ください  
NPO-SOE.JP

NPO センスオブアース・市民による自然共生パンゲア からのお知らせ

2007.1

この学校は湧水が生きる  
崖線や荒川とエコロード  
でつながっているんです。

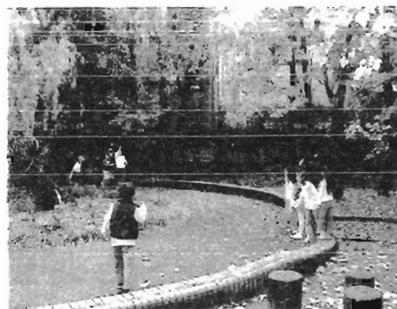
いたばし  
ビオトープ  
ネットワーク

学校で「自然と共に生きていく」ことの大切さを教える環境を創りだした

板橋区立  
志村第四小学校

学校訪問シリーズ 8

志村坂上・小豆沢公園あたりから、志村三丁目に至るあたりは、江戸時代の旅人の大事な一里塚があり、急に景色が広がる田島ヶ原の、春は桜草、秋はススキに目を奪われたという歴史に残る街道筋である。それだけではない。この地域一帯は、石器時代～縄文時代の土器などが今もなお発見できる遺跡地帯である。古代人々が選んで住んだこの地域の特長は、実は崖線からでる湧き水なのだ。煤煙にむせた昭和の工場地帯時代を経て、今は、マンションが林立する都市市民の住宅地へと急変貌しているが、今もなお豊かな自然のエコロードが続く地域であることがわかった。北区へと長く続く崖線の地形は、元からの自然を守る形となり、板橋区内でも数少ない湧水が見られ、そのすぐ先に船着き場がある荒川がとうとうと流れ、生き物たちの通り道として学校のビオトープへつながっていく。



この地域の真ん中に学校中に豊かな自然を取り込んでいる志村第四小学校がある。初冬の日差しがやわらかく注ぐある日、終始笑顔のやさしい坪野透校長先生のお話を聞く事ができた。



Q はじめに環境教育についてお考えをお聞かせ下さい。  
坪野校長先生—日本人としての基本姿勢は、自然を克服しているのでなく、自然と共に生きてきました。それを子どもたちに味わわせたいですね。ベランダに花、食卓にも花、庭園のすばらしさ、みんな自然を生かしています。

Q 子どもに与えたいと思うのはその中でどんなものですか。  
坪野校長先生—命、昆虫。命をいただくことで命が生きています。自然の輪廻です。団地やマンションの生活で、子どもたちは、お年寄りとの接触がない。死というものを身近に感じない。ゲーム

の生活。動物植物を通して、生まれ、死んでいく事を感じさせていく。鳥、魚、昆虫が死ぬとうめるでしょう。でも、子どもたちに卵を見せる。生き物の命がつながっていくことが体感できる。鳥が死んでいくと冷たくなっていくのを両手で感じる。生きているものを感じる。

緑のカーテンも同じ。水をあげないと1週間でかれてしまう。

季節を人間が変える事はできない。落ち葉、紅葉、人間は生きているんだな。日本人は自然と共に生きている。お互いにいたわり合う優しさを持っている。

児童朝会で自然教育をしています。

自然と共に生きている。全ての木を切ることはしない。残すものを考えて工夫して日本人は生きている。学校の中で、自然と共に生きていくことの大切さを与えていきたいのです。

Q 自然教育とは、どのような考えでしょうか  
坪野校長先生—3つの目標があります。

- 1, 自然を敬って自然と共に生きる。
- 2, 人間は人間とかがわって人と共に生きる。
- 3, 人間の存在価値というものは、脳を働かせて考え価値を求めて生きる。

先輩の校長から学んだものです。日本人は西洋人と違い、自然を生かして生きる、例えば、家を作るのに、塗ったりせず、素材をそのまま生かしてつくる。農耕民族としての生き方。四季の巡り合わせ一我儘をすれば次の季節がやってくる。西洋人は壊したり、奪い取ったりした。寒い暑いのみエリアとも、生き方が違ってくる。

Q 校庭にたくさんある花は誰が取り組んでおられるのですか。

坪野校長先生—学校には、花と緑のボランティア・図書館ボランティア・図工ボランティアの3つがあって、保護者はどれでも自由に参加することができます。見てください。この活動ノートにその日気づいた事をみなさんが書いてくれています。保護者のボランティアや主事さんたちと一緒に学校中にチューリップの球根を植えました。春に一斉に咲いて子どもたちを喜ばせたい。菜の花もたくさん植えています。大根もたくさん収穫しています。保護者が管理する学校園もあります。学校中明るくすること、緑にすること、きれいにすることを目指しています。  
美しい学校・やさしい学校・楽しい学校です。

Q 校内の環境教育についてお聞かせ下さい。

坪野校長先生—図工科で、3年生が、落ち葉のカーテンを作って渡り廊下の左右に張っています。とても、楽しそうな絵柄ができています。又、校内から出たソダヤ切り株で、いすや花瓶を作りました。

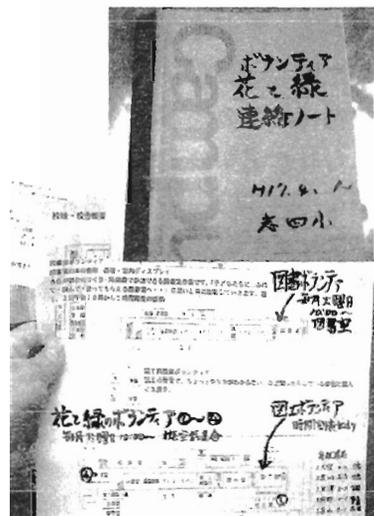
生活科では生き物探し、リースづくり、ヨット、コマづくり、カリンの蜂蜜漬けづくり、アズノの種からアンニンドーフの元づくりをエコポリスセンターの講師に指導して頂きました。

理科では、1～2年が生き物さがし、5年が花から実への単元で、ヘチマ・ニガウリを育て、緑のカーテンにして観察しました。

総合的な学習では、3年「植物を育てよう」「チョウを育てよう」「昆虫のからだを調べよう」4年「あたたかくなると」「あつくなると」「すずしくなると」「さむくなると」で生き物の1年間を観察。5年は、荒川のメダカを育て、命の誕生を学びました。



坪野校長先生



渡り廊下は落ち葉のカーテンに囲まれている

Q 子どもたちの普段の様子はいかがですか。

坪野校長先生—夏みかんの実をボール代わりに遊んだ子への指導をしました。

そして、自然の大切さを実感してもらうために1週間ピオトープの当番をやってもらいました。また、カリンの実が3つしかないのに取った子がいて、その子には体験として落ち葉当番をやってもらいました。

落ち葉をかき回して遊んだり、ミミズをトカゲにあげる子もいたり自然を楽しんでいます。花や植物が増えて、子どもたちの気持ちがおだやかになり、落ち着いてきました。先生方も花壇に植物を育ててくれています。



Q 校内にはどんな生き物がいるのでしょうか。

坪野校長先生—ヤモリがたくさんいます。アズマヒキガエル（オタマジャクシは蓮二小から）・トンボ・イトトンボ・カマキリ・トカゲ等です。



Q PTAの方々の感想は？

坪野校長先生—学校がきれいになったと喜んでくれています。

Q これから、どんな植物を育てますか。

坪野校長先生—ムクロジの実を植えました。この木は石けんの代わりに江戸時代から袋に入れて使っていたものです。ほら、こんなに泡が出て洗浄してくれます。(種は三園小から) この種は、羽根つきの羽根の元の部分として使われていますよ。また、カラスウリをもっと増やして学校中にオレンジの実を広げたいと思っています。10年後、学校を是非見に来てください。



Q 学校の周りは、自然が豊かですね。

坪野校長先生—そうなのです。学校は、湧水が出る志村の崖線、その向こうには新河岸側そして荒川とエコロードで大きな自然がつながっている地域なのです！！

—たくさんの植物や生き物が自然のまま生き続けられるピオトープを大切に、落ち葉を積み上げ肥料づくりを進め、地域、保護者と共に花を育てて学校中の緑化を進めている坪野校長先生は、“自然”からの使者のようでした。—



センスオブアースは、東京都板橋区と沖縄を拠点とする NPO 法人です。

[www.npo-soe.jp](http://www.npo-soe.jp) または [npo-soe.jp](http://npo-soe.jp) へアクセスしてください。

NHK生活ほっと

夏休みラジオ子ども質問番組でおなじみの **藤本和典さんと歩く**

## ●高島平緑地帯～赤塚公園内自然観察と赤塚森林浴バーベキュー●

今年はいつまでも暖かく、12月中旬というのにまだ紅葉が美しく、とても良い天気にも恵まれて、自然観察を楽しむことができました。

藤本和典先生と一緒に歩くと、道端や足元にあつていつもは目をとめることもなく通り過ぎてしまう木や草や虫が、実は興味深い自然の営みをしているのだということに気づかせてもらうことができます。



たくさんの自然との出会いの中から、いくつかを紹介します。

朝の集合場所、蓮根第二小学校のピオトープあたりから校庭の西側の隅を  
通って、タヌキが走り去る姿が見られた。少し太めのしっぽはネコや犬で  
はなく、まぎれもなくタヌキのものだった。

ソメイヨシノは50～60年と、寿命が短く街路樹には向かない。根が歩道  
を持ち上げたりして悲鳴を上げている。街路樹に桜を植えるなら、200  
～300年と寿命が長く強いオオシマザクラのほうが良い。

ソテツは石垣島が原産地だが、この温暖化の影響で東京でも実をつけるよう  
になった。西台駅のすぐ近くに、赤くて直径が3cm位の大きな実をつけた  
ソテツがあった。

小鳥が喜んで食べるネズミモチは、実がネズミのフンの形をしている。ヒヨドリなどの口の大きさとぴったり合っ  
ていて食べやすい。小鳥に食べられた種は遠くに運ばれ小鳥のフンといっしょに地面に落ち、芽を出すことが  
できる。丸い形をした実をつける唐ネズミモチという種類もある。種が傷つかないように、ゼリー状の果肉で覆わ  
れている。カキのたねと同じ。

ショウノウの材料になるクスノキは、枝をポキッと折るとショウノウの香りがする。その葉はアオスジアゲハの幼  
虫が食べる。黒っぽい実は鳩のえさにもなる。

ブラックバスを外国から持ち込み、日本の湖沼に放流したのはとある釣具メーカー。この魚が日本に昔からいた魚  
を絶滅の危機に陥れ、生態系を大きく狂わせている。ブラックバスだけでなく、タッピンノーやグッピーなども  
放流してはいけない。ザリガニも小さな生き物をどんどん食べてしまうので、小さな生き物の生息する池に入れ  
てはいけない。ココナツの繊維で作った浮島や岸辺を見かけることがあるが、ザリガニが隙間に入り込んで繁殖  
するので適していない。

ケヤキの花は5～6月頃咲き、秋には実をつける。小さな枝ごとプロペラのように回りながら落ちてくる。でき  
るだけ遠くに種を飛ばすためだ。小さな枝が落ちていたら拾って観てみると種がついている。発芽率が高いので、  
蔭くとケヤキの芽が出る。



自然観察の後は、赤塚公園のバーベ  
キュー広場で、焼肉や焼きそばをおなか  
いっぱい食べて、大満足の日でした。



発行

特定非営利活動法人 センスオブアース・市民による自然共生パンゲア

東京事務所 東京都板橋区前野町4-8-6 (〒174-0063) phone: 03-3960-6052 fax: 03-3960-6053  
e-mail: info@npo-soe.jp url: www.npo-soe.jp